

＜今日の説教のポイント テモテへの手紙 I 3章1～13節＞

1 全てのキリスト者に対する教えとして読むことが大事。

まだ制度が確定していない初代教会時代の監督（長老）と奉仕者（執事）に対する教えです。しかし、当時、それは一般の人々に広く伝道するために必要とされる姿であり、キリスト信者になった全ての人に求められるものですが、一番求められるのが長老と執事であることは言うまでもありません。それ故に、記されている内容と言い方は厳しく、緩めて理解しようとしてはなりません、同時にどんなことが言われているのかを正しく理解するなら、納得がいく内容です。

2 「良い仕事を望んでいる」を誤解しないこと。

出だしの「良い仕事を望んでいる」(1)はこの世的な内容で考えてしまいやすい訳ですが、「仕事」は本来の語の意味は「行為、業」であり、「気高い業を目指している」(シュラッター訳)の方がいいでしょう。13節の「良い地位を得」も同じで、「地位」は「階段、はしご」が元の語の意味で、天を目指し主の教会でふさわしい者になっていくことを言っています。なにか、長老や執事になったこと自体が誇るべき地位を得たといったことではなく、どこまでも主の福音宣教にふさわしい者の姿になっているかという視点から考えられているのです。

3 驚くべき内容。正しさの追求ではなく、品位の追求。

信仰者が注意しなくてはならないことは、「どちらが正しいか」を追求しやすくなり、自分の言い分が正しく相手が間違っていると思ったら、それを理由に激して争ってしまいやすいことです。しかし、ここでパウロが述べている内容は正しさの追求ではなく、一言で言うと「品位」(4,8,11)の追求であり、「乱暴でなく(口論せず)、寛容で(柔和で)、争いを好まず(戦いを忌避する)」(3)、「節制し」(2,11)、「中傷せず(悪口を言わず)：ディアボロス(6,7 悪魔と同語)」(11)といった内容で占められているのです。初代教会の時代、まだキリスト教が受け入れられていない中で、何でもって信仰者たるものの姿を示すか、そのことをここに見ることができるでしょう。その姿こそ、長老と執事に一番必要とされるものなのです。

4 品位を保ち、争わなくなるための心得を一つ。

アディアフォラ(どちらでもいい)を紹介しておきます。